

後は持続感染系となり得る。増殖率に影響はない。②わずか1例ではあるがRV感染細胞にRT活性を認めた事は、細胞中のC型virusの存在とRVとのinteractionの可能性を示唆するものであるが、今後症例を重ねて充分検討すべき問題である。③以上の結果は今後RVの経胎盤感染および胎児の先天性風疹症候群を考えるうえで意義のあるものと思われる。

質問 (東京大) 川名 尚  
Deciduaの細胞におけるRVの感染性はどうですか。

回答 (金沢医大) 杉浦 幸一

2例程行いましたが、Chorionと同様の傾向を認めました。

#### 296. サイトメガロウイルス(CMV)のトランスフォーメーション能に関する研究

(石川県立中央病院) 矢吹 朗彦、朝本 明弘

目的：ヘルペスウイルス群の特長は、生体内で潜伏持続感染を成立させることと、単純ヘルペスウイルスⅡ型と子宮頸癌、EBウイルスとバーキットランパ腫や上咽頭癌などの悪性腫瘍との関係が示唆される点にある。第3のヘルペスウイルスとも呼ばれるCMVも、宿主細胞DNA合成の促進、内在性C粒子の誘導との関係などから、その造腫瘍性が注目されている。私共は、この問題をin vitroに於けるCMVのtransformation能から追求した。

方法：CMV持続感染細胞(Ch/CMV)を成立させ、無処置培養、培養液中にprogesterone(1000, 100, 10ng/ml), E<sub>2</sub>(1,000, 100, 10ng/ml), hCG(10, 1, 0.1IU/ml)及び腫瘍プロモーターTPA(1, 0.5, 0.25ng/ml)の添加、コクサッキーB5ウイルスの重複感染などを行ない、Ch/CMVでのtransformationの成立の可能性を検討した。

成績：初代絨毛由来線維芽細胞にhigh moiでCMV井上株を接種し持続感染細胞を得た。このCh/CMVは、細胞集団としての持続感染系の形を取り、10<sup>2</sup>~10<sup>4</sup>PFU/mlのCMVを放出しつつ、細胞変性効果(CPE)と増殖とを周期的に繰り返しつつ、同一培養器で約6カ月継続培養され、cell crisisにより消滅した。passageされた場合も、CPEがpassageごとに増強し、11代でcytolysisに陥りいった。種々の添加物及びウイルスの重複感染処置の結果に於ても同様であった。即ち、contact inhibitionの消失、細胞株の確立、コロニー形成能の確保等のtransformation成立の現象は観察されなかつた。

考察：CMVによるヒト細胞のin vitro transformationの報告は、RappらのHCMV-Mj-HEL(1976)が唯一であるが、最近この細胞からウシ伝染性鼻腔管炎ウイルスが分離されたことや、Rappら以外にCMVによるtransformationは報告されていない点などから、CMVのトランスフォーメーション能については、さらに検討が必要であろう。

質問 (東京大) 川名 尚  
CMVの子宮頸癌との関連性はどうでしょうか。

回答 (石川県立中央病院) 矢吹 朗彦

マレック病ウイルス(トリの悪性リンパ腫を造るヘルペスウイルス群)は、in vitroでまだtransformationは証明されていない。このことより、私共の線維芽細胞をつかつた実験のみではCMVのtransformation能を完全に否定することは出来ない。しかし、ヒトの95%以上にCMV持続感染が成立している事は、もし、CMVがヒト癌と関連があるとしても、何かもう1つのfactorが必要であると考える。がんに於けるCMVの存在は、宿主細胞内に組み込まれたウイルス遺伝子が、細胞の変化(癌化)に伴ない、その増殖に同調出来なくなつた結果単に再活性化されたものであると云う考えかたも出来るのではなかろうか?

質問 (金沢医大) 桑原 惣隆  
妊娠後期の妊娠子宮頸管より約28% CMVが分離されると云う報告があるが、分娩時のとりあつかいについてどうお考えか。

回答 (石川県立中央病院) 矢吹 朗彦  
96%以上の妊娠がCMV潜伏感染状態にあり、抗体を保有しているため胎児の抗体移行が考えられ、初感染でないかぎり産道感染の心配はないと考える。

#### 297. 産婦人科領域における無芽胞嫌気性菌感染症に関する研究、第1報：無芽胞嫌気性菌の分離について

(岐阜・多治見市民病院)

二宮 敬宇、長谷川幸生

1) 研究目的：無芽胞嫌気性菌(嫌気性菌)の化学療法剤に対する感受性はE. coli, S. aureusなどの通性嫌気性菌(好気性菌)とは大きく異つている。又、この嫌気性菌が婦人外性器の優位常在菌叢を構成している。この為、本領域では嫌気性菌の動態の把握が感染症において重要な意味をもつ。近年、嫌気性菌分離に関するTechnologyには飛躍的発展がみられ、Mooreらは産婦人科などの臨床材料から80%以上に嫌気性菌が分離され、その感染症の重要性を報告している。演者らはこの